光明

第八號卷第十卷号

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
大正十五年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
大正十五年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第八卷第十號　定價金拾錢

本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

大眞日本宗　光明團本部發行

合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生ん。

第五、『四海の信心の人は皆兄弟。』其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

願念

一。自信教人信。自分ばかりが喜んでゐないで緣のつながる隣人に一味の法悅を分ちたい

一。報謝。ご恩づくめの中に生きてゐることに感激して、身を粉にしてゞも報謝の生活が營みたい。

一。俗諦。無明の醉のさめぬに重ねて毒酒をすゝめぬやうに。教育勅語戊申詔書の聖旨にかなふ忠良な國民となりたい。

一。向上。一生の間、知識先輩のみ敎に聞き、念佛三昧信仰生活の向上を計りたい。

一。提携。外への戰の爲でなくて、自身敎化耕養のために確乎たる團結提携を期したい。

巻頭の叫び

人がそしつたと泣くのか。
如來のみ聲を聞かうではないか。
人が疑つたと泣いてゐるのか。
如來のみ聲を聞かうではないか。
迷へる人にほめられて地獄にゆくのか。
如來にほめられて如來となるのか。
藝者にもすかれ、親にもほめられる人であり得ると思ふのか。
眼を光明界にそゝげ、地上十六億の人が皆そしつても、おゝ
永遠にほめたまふみ親を知らぬか。
汝に念佛のやまぬかぎり
汝に合掌のやまぬかぎり
永遠に汝は法界の勝利者である。

光明攝取と功德廻施

住岡狂風

涅槃の眞因

釋尊は、人が若し惡いことをすれば地獄におちてゆく。善いことをすれば天上界に生れ、信心を得れば佛となることをお說きになりました。佛になる即ち淨土に往生しやうと思へば、信心を得ることが大切であることをお說きになつたのであります。

誠に我々が救はれる原因は唯、信心を得ることにあります。信心を得るとは如來の眞實心に目覺ることであります。如來の生きた血潮が私たちの死せる魂に通ふて來ることであります。疑ひやまどひの心が晴れて、金剛の決定心を獲得することであります。

信仰生活に入ることを求める者の最も陷りやすいことは唯頭で思ひかためて、信心らしいものを作りあげやう、理窟と哲學で、信心を作りあげやうとする、概念の遊戲に知らずして陷ること、今一つは、この思ひかためた人間のはからひを打破るためにそんな信心はいらない、如來のお誠一つで助かるのであるといふことを、又淺合點して頭だけで受取てしまひますと、如來のお誠だけでたすかるのだと知つたまゝ、云ひかへるとそれも亦一つの言葉の遊戲になつてしまつて知らず識らず、眞實信心さへなくてもいゝやうにとつてしまふのであります。信心を思ひかためやうとしてゐるのも、信心はいらぬと言つてゐるのもどちらも間違ひであります。

さうした間違ひにおちてゐても、理窟はどうにでもならべられませうけれど、眞に心に問ふて見た時、どうして眞の安心がありませう。ほんとに內省した時、云ひ知れぬ淋しさと、心細さと、不安とがある筈であります。

歸命

信心を得るとは如來に歸命することであります。御文章には蓮如上人が度々このことを申されてあります。

『一念に阿彌陀佛に歸命せば、かならずその機をしろしめしてたすけたまふべし。それ歸命といふは、すなはちたすけたまへとまうすこゝろなり。』

とあります。八十通の御文章の至るところに、『一心一向に阿彌陀佛をたのめ』とあります。歸命とは、衆生が如來をたのむことである。しかしたのむとは決して普通の意味のたのむとは違ひます。たのむといふことを今、味つて見ますに

印度では　南無
支那では　歸命　（歸托——まかす　歸順——したがふ）
日本では　たのむ　（命——勅命）

如來に南無する。如來に歸命する。如來をたのむ。皆同一であります。そして歸命とは如來の勅命にしたがひまかすことであります。私から至誠の心をおこして、願求したり祈禱したりするのではなくて、如來の眞實のみ云葉に、したがふのであります。如來の大慈悲にふれるのであります。如來のみ光によつて如來のみ光に目覺めることであります。歸はしたがひまかす。命は如來の招喚の勅命であります。ですから歸命とは、如來の願力勅命が、私どもの心にとゞくことであります。私にとゞいた時、私は如來に歸命します。ですから歸命とは、如來の勅命そのものに目覺めることであります。それがたのんだ心であります。歸命とか南無とか、たのむとかはそれが、凡夫の迷ひ心をこねあ

げたことではなくて、佛心そのものを私に下さつたことであります。

歸命したとは、信心を得たことであります。『信心とはまことのこゝろとよめるなり。まことのこゝろとよむ上は凡夫の迷心にあらず、全く佛心なり。』このまこと心を我等衆生に廻向して下さる時、それを私の信心といひます。この如來廻向の信心のみが、私をやがて佛陀たらしめるのであります。されば信の卷にも『涅槃の眞因は唯信心である。』と云いきられてあります。この如來廻向の信心のみが私を淨土へと往生せしむるのであります。

信心も安心もいらないのだと云つたり云葉や思ひの上に信心をこねあげたりしてゐることはどちらも、如來を見失ふた外道であります。如來の生きた血潮が私の濁つた心に注がれます。如來の生きたお力によつて、弱りきつてゐる私の心は救はれ、蘇るのであります。この私の信念の姿こそ又、歸命であります。如來に歸命する者だけが如來になるのであります。如來に歸命しないものがどうして如來になり得ませう。如來は眞實であります。歸命の心も如來廻向の眞實であります。歸命の心は、そのまゝ阿彌陀佛

のお力であります。たのむ機はたすける法と一体であります。

發願廻向

『されば一念に彌陀をたのむ衆生に、無上大利の功德をあたへたまふを、發願廻向とはもうすなり。この發願廻向の大善大功德を、われら衆生にあたへましますゆへに、無始曠劫よりこのかたつくりをきたる惡業煩惱をば、一時に消滅したまふゆへに、われらが煩惱惡業はこと〳〵みなきえて、すでに正定聚不退轉なんどいふくらゐに住すとはいふなり。』

この御文をしみ〳〵と拜讀致しますと發願廻向の文字が光つてゐます。發願廻向とは如來が、無上大利の大善大功德を如來を信ずる一念に、衆生に下さることであります。今、救濟といふことを私の方に立つて申しますなら、一念歸命であります。信心であります。救濟といふことを如來の方から申しませば、其第一は、この大善大功德を衆生に廻施して下さることであり、其第二は、光明の裡に抱取つて下さること即ち、攝取不捨であります。

功德廻施

『五濁惡世の有情の
選擇本願信ずれば
不可稱不可說不可思議の
功德は行者の身にみてり。』(和讃)

と親鸞聖人は歌はれました。まことに如來の選擇本願を信ずる者は、不可稱不可說不可思議の大功德を與へられるのであります。

これを今少し溯つて、眞宗の根本聖典たる、大無量壽經の下卷を拜讀致します時、釋尊は彌勒菩薩に告げてゐられます。

『彌勒まさに知るべし。其れ菩薩ありて疑惑を生ずるものは、大利を失せりとす。是故に應にあきらかに諸佛無上の智惠に信ずべし。』

釋尊の御親切は、彌勒にこのみ云葉となつて表はれます。『彌勒よまさに知れよ。若し菩薩にして疑ひ惑ひの心を生ずる者があれば大なる利益を失ふことになるぞ。だからあ

きらかに諸佛の智恵を信ぜねばならない。』との思召しであります。更に、釋尊は

『佛、彌勒に語りたまはく。彼の佛の名號を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。當に知るべし。この人は大利を得となす。則ちこれ、無上の功德を具足するなり。』

と仰せられます。彼の名號とは南無阿彌陀佛の名號であります。この六字の、お救ひを聞くことを得て、歡びの心が一念おこる時、この人は大利を得ることが出來る。この名號は無上の功德を具足してゐるぞよ。』とのみ云葉であります。如來の生命を我が生命とせる者は、この大功德を得させて頂くとのみ云葉であります。

大善大功德が名號六字のうちに含まれてあります。南無阿彌陀佛は大善、卽ち、絕對善の表徵であります。善惡を超ゑた、絕對の善を表白された記號であります。この大善に隨喜し、歸命する者はそのまゝこの大善を把持し、獲得した者であるとのみ云葉であります。

『かやうに彌陀をたのみまうすものには不可稱不可說不可思議の大功德をあたへましますなり。不可稱不可說不可思議の功德といふことは、かずかぎりもなき大功德のことなり。この大功德を一念に彌陀をたのみまうす我等衆生に廻向しましますゆへに、過古未來現在三世の業障一時につみきゑて、正定聚のくらゐ、また等正覺のくらゐなんどにさだまるものなり。』

と御文章にあります。まことに名號を眞に生命として体得させて貰ふた者は、不可稱不可說、不可思議の大功德を得るのであります。

私どもは所詮貧窮であります。法律の門をくぐる時は若干の持物もあるでせう。更に道德的に考へた時、まだ幾何かの善もあることでせう。しかし死の聖關をくゞる時には何等の功德善根も有せないのであります。神や佛に捧げ得るほどの善を持つてはゐないのであります。善だと誇つたものも、皆な雜毒の善として嫌はるゝのであります。さうした私どもに、如來が至心に成就したまへる絕對善である名號を廻向されるのであります。法藏菩薩のお誓ひにあります。

『我れ無量劫において、大施主となりて、普く諸〳〵の貧窮をすくはずんば誓ふて、正

覺を成せじ。』

このお誓ひがそれであります。諸〻の貧窮とは私どものことであります。如來はまことに功德の大施主であまります。如來の唯一のお誓ひが、貧しきことに泣く我等に、この大功德を施したいとのみ心にのみ燃えたまふ大慈大悲のみ親にてましますのであります謹んで、如來の前に拜跪合掌して、み名をよぶ時、如來の生命たるこの絶對善は我等に與へられてゐるのであります。『彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり。』とは蓮如上人のみ云葉であります。

攝取不捨

如來のみ救ひを如來に立つて伺ひます時、一つには功德の廻向でありました。又一つには、光明攝取であります。お光の中にいだきとられることであります。攝取不捨の根據は觀無量壽經に出ております。有名なる

『光明編照十方世界、念佛衆生攝取不捨』の御云葉がそれであります。誠に、如來の光明は編く十方微塵世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはざるのであります。

この心を和讃には

『十方微塵世界の
念佛の衆生をみそなはし
攝取して捨てざれば
阿彌陀となづけたてまつる。』

と、祖聖はまた歌ひになりました。更に又蓮如上人は御文章に、和讃をひきつゝ

『このこゝろをまた和讃にいはく、彌陀の本願信ずべし。本願信ずるひとは、みな、攝取不捨の利益ゆへ、等正覺にいたるなりといへり。攝取不捨といふはこれも一念に彌陀をたのみたてまつる衆生を、光明のなかにおさめとりて、信ずるこゝろだにもかはらねば、すてたまはずといふこゝろなり。』

と讃嘆しておられます。攝取不捨といふは、これも一念に彌陀をたのみたてまつる衆生を光明の中におさめとりてすてたまはずといふことであります。これを体驗の聲として申しますならば、如來の光明に攝取された時、一念に彌陀をたのむ衆生とならせて頂く

のであります。攝取不捨のみ光に目覺めた時、私どもは、如何にしてもこのみ光の中を出ることが出來ないのであります。光明界裡に呼吸せる我を見出した時、どうして聲たからかにみ名をよばずにゐられませう。虛空のやうな得げのない廣い世界に生きさせて貰つてゐることに最大なるよろこびと、安心とを得させて貰ふのであります。私どもはたとひ、天地の外にこの手足を出すことは出來ても佛恩の中より、この我を出すことは出來ないのであります。祖聖は御本典の總序には、『誠なる哉、攝取不捨の眞言』とたよろこびになつてゐます。

等正覺

凡夫から佛への段階を、十信十住十行、十廻向、十地、等正覺、妙覺の五十二段にのべられてゐます。等正覺とは、五十一段のことであつて菩薩の最上位であります。彌勒菩薩がそれでありました。然るに念佛の行者は、この等正覺の價値をゆるされてあります。

凡夫が決して凡夫をはなれたのではなく、菩薩になつたのでもありませぬ。如來のみ

力が、凡夫をそのまゝ價値づけるのであります。一重に如來の權威であつて凡夫のはからひではありませぬ。

『この大功德を、一念に彌陀をたのみまうす我等衆生に廻向しましますゆへに、過去未來現在の、三世の業障一時につみきえて正定聚のくらゐ、また等正覺のくらゐなんどにさだまるものなり……』

『彌陀の本願信ずべし。本願信ずるひとはみな、攝取不捨の利益ゆへ等正覺にいたるなり。』

この二つの文を注意致します時、どちらにも等正覺とあります。そして前の文には功德を廻向し三世の業障をうち破つて下さるから等正覺のくらゐにさだまると云ひ後の御文には、攝取不捨の利益によつて等正覺にいたるとあります。

先きに述べました如く如來は、私を攝取不捨すると共に、私に功德を廻向して下さるのであります。しかしこの二つは別々に行はれるのではなくて、光明攝取の當体に功德を與へて下さるのであります。私が如來に歸命する一念に、等正覺のくらゐにさだまるのであります。攝取不捨の利益によつて歸命する衆生は等正覺であります。功德の廻向

があればこそ等正覺のくらゐにさだまるのであります。

『無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
　彌陀廻向のみ名なれば　功德は十方にみちたまふ』（和讃）

『しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきがゆへに惡をもおそるべからず。彌陀の本願を妨ぐるほどの惡なきがゆへに。』（歎異鈔）

いづれも親鸞聖人の力强き信念の叫びであります。東天に太陽が上つた時、今迄ともした小さき提灯には用はありませぬ。又如何に黑雲が太陽をおほふても夜のやうになつた例はありませぬ。心の東天に信念の太陽が上つた時、善と惡とを超ゑて、至上の善に生きてゆきます。念佛は、それがそのまゝ、大善であり大光明であります。今や私どもにはこの大功德がみ名によつて廻向されてあります。合掌してみ名をよびます時、私の全靈は如來の光明のうちにゐます。御恩づくめの私が、恩の結晶体である我が矢張り罪惡生死のまゝ光明界裡の黑雲として動いてゐます。唯懺悔と感謝との外に何がありませう。合掌して念佛することこそ與へられて、惠まれて生きる者の全部であります。

横川聖者

源信和尚（四）

伊勢大神宮

血をはくやうな源信和尚の求道生活にもまだ、往生得道の大光明はみつかりませぬ悶えに悶ゐる若き求道者は遂に心を決して遠く伊勢の大神宮に參詣して、一縷の光明を見出さうとしたのでありました。

昔から日本には佛敎の本地乘迹說が信じられてゐました。それは、日本の伊勢大神宮は、衆生救濟の爲めに久遠本覺の大日如來が迹をこの地に垂れて天照皇大神として現れたまふたといふのであります。だから昔から名僧大德にして伊勢大神宮に參詣して啓示を受けたといふ傳說は多く殘つてゐることであります。

源信和尚も今や胸中の大苦悶を解決すべく、此の大神宮に參籠したのであります。源信二十八歲の頃、墨の衣に、菅の笠、孤影瓢然として比叡山をたち、賑かな京の都を後にして旅路はるかに、山又山、求道の日數を重ねて、伊勢大神宮に到着しまし

た。

『何事のおはしますかは知らねども
たゞ尊さに涙こぼるゝ』

とは西行法師の歌であります。

尊嚴自ら頭が下ります。五十鈴川の水はいや清く、老杉は暗いばかりに繁つてゐます。源信は今やこの日本第一の靈境に、七日間の參籠祈願をはじめたのであります。

『南無大日如來願くば源信に生死出離の道を示したまへ。
『南無天照皇大神願くば源信に唯一無二の信を與へたまへ』

と一週間、血の汗をしぼつて、寢食をも忘れて祈りに禱つた。七日間の祈りの日はすぎました。夢か現か、彼は体の疲れに我を忘れるよと思ふ間もなく、神宮のみ戸は、靜かに開けて、一人の尊い貴女が現はれ出でゝ、み聲も涼しく

『大神宮は本覺の都へかへります。これは御留守に待る者也。末代の衆生出離の要道をたづぬる事あらば、彌陀佛を念せよとすゝむべき由仰せおかれたり。』

との仰せ、源信おどろきて仰げば貴女ははや姿を消してしまつた。夢はさめた。彼は感涙にむせびつゝ大神宮を拜み奉つた。

源信和尚の悶へは、ふきはらはれて、すがゝしい心地で念佛するのであつた。夜はほの〳〵と明けそめて森の中に鳴く鳥の聲さへ心地よく、源信は神前に拜跪して立上りました。

『曉の鐘の聲さへ嬉しけれ
永き浮世のあけぬと思へば』

と和尚の歌でありました。源信和尚は今や彌陀の慈光の攝取に、胸をおどろかせつゝ歡喜の歸路についたのであります。

歸路源信和尚は、京都の東、六波羅密寺に空也上人を訪ひました。空也上人はもう齡を七十に近い身で圓熟した念佛の行者であります。

『一度も南無阿彌陀佛といふ人の
はちすの上にのぼらぬはなし』

とは空也上人の歌であります。常にこの歌を唱へて市中をまはり、念佛をすゝめて歩かれたので市上人とか彌陀聖とか云はれてゐました。空也上人の感化は大したものでありました。

源尚和尚は伊勢からの歸途、この空也上人を、六波羅密寺に訪ふたのであります。上人は諄々として彌陀の救ひを說いて聞かされました。

若き源信はいよ〳〵信仰の人となりまし

た。さうして上人に厚く禮を述べて叡山に歸つてゆきました。

横川隱退

圓融天皇の天祿二年、源信和尚三十歳の時、横川の奥に隱退されました。これから後、源信は横川の名と共に殘りました。

横川の聖者といふのもつまり、これから出たのであります。

一体叡山には、東塔、西塔、横川の三塔があります。横川は、根本中堂を去ること五十町、横川の流域であります。大木鬱蒼として茂つてゐる、尊き靈場であります。横川の中堂を首楞嚴院といひます。一時、大變榮えてゐましたが、後しばらくさびれておりました。源信和尚の師である慈悲大師が出られてから又横川は榮えて來て、東塔、西塔も其勢に及ばなかつたのであります。

源信和尚はこの横川に、退かれたのであります。これより以後淨土に召される日までこの地にゐられてひたすら念佛生活の爲めに精進されたのであります。この横川には藤原兼家が慈慧僧正のために建てた惠心院といふのがあります。この惠心院に住持せられましたので、惠心僧都とも申します。

天上から下界へ

住岡狂風

□

細々とみ佛の敎へに順つて、念佛生活をさせて頂くことを心から有難う思ふ。『一人の人間が救はれる』それほど大きなことが何處にあらふか。合掌してゐる今の私が私の全体である。あゝこの全体。この全体こそ、私の過古の全体であり、未來の全体である。噫。この合掌してる全体、この全体が南無阿彌陀佛であつた。

□

一人の人間が、毎日笑つたり、泣いたり、怒つたり、恨んだり、憎んだり、愛したりしつゝ、あてどもなく時間と共に流れてゆく。風にふきまはされてゐる浮草のやうに。拜むことも知らなければ、道を求めることも知らない。死も考へねば、生きることを

も考へない。唯夢のやうに暮れて、夢のやうに明ける。さうした人たちの一生は、のんきであるかも知れぬ。しかしそれは決して尊い價値の一生ではない。

□

一人の人が何でもないことを高い聲で得意さうにしやべつてゐる。言はなくてもいゝ小理窟、勝たなくてもいゝ議論、大した手柄でもない自慢話、周圍の人は皆な嫌な顔をしてゐるのに、一人で語つて一人で得意になつてゐる。それが何になるのだ。

一人の人は、善良な質であるのに、全靈をあげて合掌しつゝ罪惡に泣き、御恩に感謝して念佛してゐる。

私は二つの事實を思ひつゝ涙してゐる。

□

口をとぢやうじやないか。それ位のことが自慢話になると思ふのか。私どもにはまだまだ何にもわかつてはゐないじやないか。

口をとぢて考へやうじやないか。今言つてゐることに、どれだけの根底があり深さがあるか。ちつと深く考へて見やうではないか。口をとぢやうではないか。

□

戸河内支部の發會式の時、私は團員の皆樣に低い聲で告げた。

『迫害やら、攻擊やら、疑ひやらの唯中に皆樣はよく精進して下さいました。皆樣も苦しいことでありましたでせう。でも私たちは佛の道に精進させて貰ふのです。

同じ迷ひの人たちの無責任なる、おほめにあづかつて、有頂天になつて騷ぐほど自分知らずにはなりますまい。同じ迷ひの人から疑はれたり惡く云はれたりして悲觀したり自卑したりするほど無信仰の日暮は致しますまい。

私たちは唯至尊の前で褒られたらいゝのです。お淨土へ召されて、み親の前に一度、褒められたらいゝのです。』

皆樣の中からはしのび泣きの聲が聞こえます。

□

私たちは他人の毀譽褒貶に動きやすい。ほめられたり、高あがりして得意になり、お

とされたり、けなされたり、疑はれたり、惡く云はれると暗い心になつて自卑てしまひやすい。

しかし合掌して念佛しやう。み佛は『善男子よ、善女人よ』とよびたまひ、一人子よと呼びたまふではないか。噫、至尊の前に褒められる人になりたい。さう思つた時だけ私たちは、浮世の褒貶から超えることが出來る。

□

私は極端に惡く言はれ、極端にくさされる。戰ひの好きな私でもないし、おとなしくさけて〳〵注意して生きて行かうと心掛けるのに。

一ヶ所講演にゆく。會場が破れさけるほど人が集る。力一ぱい叫んでかへると後からきつと暗い手が動いて、反對運動が魔のやうに現はれる。私はそれを悲しいことに思ふます〳〵地上だなあといふ悲しみが增して來る。

□

私を深い內省へと導く。私たちは無責任に他人を褒めたり、惡く云つたりしてはゐなかつたか。惡く云つた者よりも、云はれた者が偉大であつた場合が多いゝ。

藥はなか〳〵利かぬけれど、毒は一度でも人を殺す。疑ふ。それを云ひふらす。他人から噂を聞く。それに尾鰭をつけて云ひふらす。毒はすぐ廣まつてしまふ。云はれた人は血みどろけになつてしまふ。親鸞も、日蓮も、法然も、キリストも、過古の偉人聖者は大概皆それであつた。私は私たちの眞の恩人をかうして血を流させてはゐないだらふか。

云はれてもいゝ。しかし云ふ人にはなりたくない。

□

眞實に生きたい。眞劍に生きたい。と眞一文字に進む人がある時、百人が百人、皆一緒にこれをほめたり、これに共鳴したりするほどこの世界は清らかには出來てゐない。

しかし眞面目な者を眞劍な者を百人が百人、十人が十人皆一緒に傷つけるほど無慈悲にも出來てはゐない。

□

『凡人に愚弄せられる馬鹿でありたい。』

と何かで見た。

眞面目な青年や、學生が、墮落した仲間に愚弄せられる。

魂が腐つて、惡になれて、惡に對する腰が強くなつた者たちは、善人を愚弄し眞面目の人たちを愚弄する。

愚弄されつゝも猶、精進する者は幸なるかな。

□

私の書いたものを全部讀み、私の話を全部聞き、そして疑ひがあれば、來て話して下さつて、まだ私が惡い時には、如何に、惡口雜言されてもいゝ。さうした人であるならば、其前に頭を下げて謹んで敎を受ける。

私は唯、陰口の人ばかりであることを悲しむ。かげ口の人であるならば犬の泣いてゐる位にしか思ひたくない。

□

信じてゐて裏切られることがある。私はすぐその人を惡く思ひ易い。けれどもそれは惡いことである。

酒を澤山飲んで來て講演の邪魔をする人がある。それをすぐ惡い男だと云はふとする何といふ了見のせまいことだらうか。來てゐない人よりは佛緣が深いのかも知れぬ。

いや時には、佛敵をしかけた人が急に懺悔して今は普通人よりは、もつと徹底した、善良な念佛者になつてゐる人もある。

誰をも敵にしてはならない。假令斬られても敵にしてはならないといふ心がする。

□

私は貧しい。でも今日も三度食事をとつた。着物も着てゐる。『先生はあゝしてその先きをどうするのだらふ。』心配して下さる方がある。でも嬉しい。若い人は學校に通ふ。女たちは內で仕事をする。ゆるされた人は來て、ある間食つて下さい。み佛樣のおかげで十數人の人たちがそれ〳〵生きてゐる。

惠まれたものは惠む。與へられたものは與へてもいゝ。

食へなくなつた時には、足腰のたつ者は車でも輓く覺悟だけ持つてくれ。

□

大方の人には、後にひける餘裕がある。私にはそれがない。全てにおいて私の背は火の川であり、大河である。唯進むことだけがゆるされてある。私は唯一人でも進まなければならない。

□

堂々たる博士でも、下女の不機嫌な日には其心を不快にする。奥樣の御機嫌のそれてゐる日には其心が曇る。博士の哲學よりは、奥樣や下女の感情が強いかも知れぬ。

人は大きな理窟を云ひつゝも、小さい感情で動く。

□

崇高な情緒を持つた人を人格者といふ。圓滿な人格者は圓滿な感情をもつてゐる。人は理論では動かないで、感情で動く。持ちたいものは、優れた感情である。

小さく動き、小さく表はれてゐる感情の底には生きた大きな力が動いてゐる。

『光顏巍々』といふお經の言葉は、高い慈悲の情に燃えた佛の、おかほの有樣であらふ。

□

小さい親切、その小さい親切が人を生かす。自然に出た一言葉、贈られた花一本、その中にも尊い情がもられた時、捧げた人を清める。

老婆が、講演のあと、たつた四錢の金を出して、涙にむせびつゝ、み佛にそなへてくれと云つた時、私たちは天を仰いで感謝し、地に伏して泣いた。

□

女は美しく作られたものであるが故に一番醜い者である。男よりも溫い者であるが故に、又男よりも冷たいものである。

心してゆけ、女性。女性の溫情は夫を生かし、子供を生かし、社會を生かす。しかし汝の冷たさは、夫を殺し、子供をころし、社會をころす。

□

かろく人をほめる者は、かろく人をそしる。輕く人を好く者は、輕く人を惡む。そしてそれが女性である。

□

様々な世相からはなれて静かに念佛し、地上をはなれて高い聖域に心が遊ぶ。心を、弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す。しかし私どもは又あの騒々しい生きた社會にも出てゆかねばならぬ。いゝね、生きた、血と涙と濁と爭ひと悲しみと呪ひとのある生死の園にかへつた時力強い叫びをうちにきく。今こそ如來を憶念しつゝ、雄々しく出てゆかねばならぬ。

お願

一。どうか皆様の御同情で同胞を紹介して下さい。雜誌の讀者を一人でも造つて下さい。

一。誰かに光明が見せたいと思つて下さる方があれば御厄介ですが、はがきに姓名と住所とを書いて送つて下さい。殘本を送ります。

一。雜誌代の出ない時は其旨を御通知下されば唯で差上げます。

正信偈の話（三十一）

第八章 道綽禪師

四、安養の妙果

（本文）一生造惡値弘誓（讀方）一生惡を造れども弘誓に値ひぬれば
至安養界證妙果　安養界に至りて妙果を證せしむといへり。

（字義）

『弘誓』　第十八願のこと、如來絶對救濟の本願。

『値』　『一念多念證文』に『遇はまうあふといふ、まうあふといふは、本願力を信ずるなり』とあります。値はあふこと、信ずること。

『安養界』　彌陀の淨土のこと。安心養身の世界、心身安樂なる世界。

『妙果』　勝妙なる果報の畧で、佛果のことである。

（講話）

一生造惡

一生造惡の凡夫とは蓋し私どものことであります。善人でありたい。善いことがしたいと思ふ心が深まるだけ内に見えるものは惡い心のはびこりであります。口に肉食をし身に妻帶をして日々の生活におはるゝ我等は所詮一生造惡の子であります。手にかけてこそ他人を殺さゞれども、意には如何なる惡心をもおこします。善導大師の罪惡生死の凡夫といふ告白、極重惡人、十惡の法然房、必墮無間の親鸞と、過古の聖者たちも皆一生造惡の痛ましい姿に泣てゐられます。我等凡夫いかでか一生造惡の名を免れませうぞ

値弘誓

値弘誓とは弘誓を信ずることであります。如來の本願にあふことであります。如來の本願は一生造惡の凡夫であるべき私どもを救つて下されたのであります。貪慾、瞋恚の煩惱の胸底深く如來の本願は徹入して、遂に念佛となつて表はれて下さつたのであります。『我今本願の名號を持念す。』貪慾は生され、瞋恚の炎は燃ねあがれど、念佛は泥の中の蓮の如く火中の蓮華の如く我等が造惡の胸に生れ出でたのであります。

至安養界

如來自然のおはからひで眞實信心の人は安養淨土に至るのであります。誰も皆何かによばれて、何處かにゆくのであります。信仰の人は、今日今から白道の上に立つてゐます。『汝一心正念にして直ちに來れ我能く汝を護る！。』との彼岸の招喚の勅命は今日の私の生活を大安心の上に決定してゐます。願力の不思議は我等の命の終る時、速に安養淨土に往生させて、無上涅槃の妙果を得させて貰ふのであります。淨土に召される日まで、精進させて貰ひます。

證妙果

永遠の六道輪廻に沈みはつべき我でありながら一念の信まことなれば、今度迷ひを打きつて、安養界に至れば、無量壽無量光の如來と同一なる覺を得させて貰ふのであります。佛のさとりを開くことは佛徒の大理想であります。

人は皆死にます。五十年の歳月は長きに似て、しかも時間の悠久を思ふ時、眞に唯の一瞬であります。人生五十年の日暮を如來にまかせて安々とすぎゆきます。如來の本願力はやがて淨土に往生せしめて佛のさとりを開かせて下さるのであります。

講演豫定

十月
十　日—十三日　福山市外川口　寺
十四日—十六日　深安郡廣瀬村眞光寺
十七日—廿一日　沼隈郡鞆町明圓寺
廿　二　日　鞆町招魂祭講演會
廿三日—廿五日　深安郡千田小學校
廿六日—廿八日　福山市外郷分村
廿九日—卅一日　福山精神文化協會
十一月
一　日—三　日　本部例會
六日晝二時　東洋大學眞宗會
夜七時　淺草東本願寺心光會館
七日晝二時　淺草佛教傳導會館
夜七時　九段坂佛教倶樂部
十　日—十二日　名古屋地方（以下未定）
十三日—十五日　京都
十六日—十八日　福井
十九日—廿一日　大阪
廿二日—廿四日　神戸
廿五日　岡山

東への講演の豫定地

今日までに、左の方々から講演の御交渉がありました。近所の方々は、これらの方に、御様子お聞き下さい。

東京市本郷區丸山福山町七齊藤勇助様方　臺愚狂様
福井縣丹生郡西安居村　高原彦市様
京都市醒ヶ井花屋町上ル今井彌三郎様方　藤原三千丸様
大阪市北區松ヶ枝町一二　宮本勝美様
岡山市内田一六三ノ一三　中村松男様

猶、これ以外にもまだあること、存じます。關東中部、京阪の皆様の御盡力を願ひます。

輪だちのあと

カマセ●シセン

懐かしの高田へ

八月廿九日
同　卅一日　高田丹比村敎善寺婦人會

主管は花岡師と二人で大朝へ。私は一人でこゝに來る義誠團へ來た時と今回で二度目。青年達が待つていてくれることがうれしい。お同行のたれもが十年の知已の様な心もち。婦人會の講演にもかゝわらず演臺の前はスラリとならぶ青年處女の顔は若い私の血をいやが上にたぎりたゝせる。座敷に座ると青年達は涙ぐんで合掌してくれる。——噫如來は生けり若き青年の胸に！

こうしたうれしい集ひはお互ひの心と心をシツカと結びつけて團員が三十名ばかり出來て支部發會の運動を誓つて一日の午後サヨーナラをする。栗津師婦人會員青年團員お同行達の御親切を謝します。

九月一日
同　三日　同郡小田村山田宗利俊造氏宅

自動車を捨て、吉田の池本まで着くと早どこから聞いたのかお同行が四五十人寄る。二時間ばかり座談して夕方池本さんと二人で峠を一つ越して小田村へ……一方ならぬ心配で宗利さんはこの會を開いた。親の宅にでもかゝつたかの様に我まゝを云つたり話したりする。

熱心な滿座の聽衆に動かされて話は佳境から佳境へと進む。生存から生活へと更生しようとする青年、壯年の姿は見るだに涙ぐましい。往岡主管は此間本部にて例會

四日朝晩五日朝四席——吉田青年團第二分團講演

私は四日早朝宗利さんと丸山顯照氏とに送られて第二分團に行く。こゝは以前から因縁のある平原敏一法兄の御盡力で養蠶供養の講演を合して四席のお話しをさせて頂く。こゝもさばきのとれぬ參詣、氣もちのいゝ會で夜は躍りも見せて頂いた。

四日晩より
六日まで　同郡可愛村同心會講演——同村圓正寺にて

主管は四日の晩から來て頂いて五日日中より私と一緒で大きな御堂に一杯、餘間にまで足の入れ場もない聽衆

こゝは實に氣もちのいゝ講演會で住職も若院秋田美泉氏（東洋大學在學）も非常に氣持のいゝお方で思ひ存分話さして頂く。先生も私も血を振つてお同行に肉迫する。身体は洗ふた樣にアセびつしより。

氣持のいゝこの反響。動いた〳〵底ぬけ動いた三四十名の團員をぶんどつて引上げたのが六日の午後、二人は吉田へ……

六日晩より吉田三町青年團講演會——法專寺にて

八日晩まで

最初の晩から餘間へ迄一杯、さばきが取れぬ。丹比吉田可愛からお同行はつめかける。二人で三時間のぶつ通し。講演に聽衆もつかれぬがこちらも敗けぬ。夜は一時から二時頃まで座談。それに高林坊の新田先生、淨圓寺の長尾先生、淨樂寺の吉川先生等が來られて謙虚な求道ぶりにはさすが横着者の私も頭がさがる。一体私は旅でつまらないお同行の言葉や動作の中から貴い教化を受けることが多いゝが、こゝでは殊に青年處女壯年老年と驚異にあたいする説法を頂いた。九日の朝サヨナラ。

何故か別れがつらくて泣けて〳〵仕方がなかつた。こうした時にだけ地上は温いと思ひます。

十日晩より

十三日晩まで佐伯郡津田村青年會舘

こゝは主管には淺からぬ深い因緣をもつところ、傳導部では悲風、愚狂、白道氏達が更る〳〵血を流したところで私は今回が初陣。妙なことでこゝは因緣が深いだけに誤解もあつた。念佛はすべて迫害せらるべき性質のものであると、シンラン樣の心持にも、見ゐてゐるようだがいつの時代でも眞實を傳へようとする者には誤解と迫害はつきものであるらしい。死んでゐるところだけ誤解が多い。それだけ運動して見て氣持がいい。迫害のちょつともない位な運動ならせぬ方がましである。誤解の多い中を正木まさ子樣を始め二三のお方の血の出るやうな努力で開かれた講演會だけあつて、壇に上れば涙ぐまづには居られない。主管も私も必死の努力をもつて、この戰に肉迫した。血は血によつて報ひられる。打つ警鐘が何で響かずに居るものか。さしも廣い百疊以上も敷ける大講堂もギツシリ一杯、指おれば夜の座等は千人に餘る大聽衆。十二日の夜閉會後、團員のみの集會を開く。血をもつて如來の深恩に報はんとする勇士四十有餘。意見を聞て見る。

最後までやらう……

團旗が血に染るまでやらう

反感まで買うてはいかぬ

眠つてゐる者が起された時は立腹は決まつてゐる……等とあこでもここでも話し聲が聞ゐる。

決局〻部を設けることに決定、即ち支部長幹部を人選し、支部長を吉中卓次氏に任じ、共力一致して大運動を開始することにし十三日の夜は幹部が集つて茶話會を開く。今回の宿は西福寺で、住職高都路師は無理解な民衆の中にあつて一方ならぬお骨を折つて頂いた。

皆樣有難ふ——あなた達の信念の血で津田の天地に血のにじむ稱名の聲を聞く日の來ることを念じつつ　合掌

十四日晩より

十七日中まで世羅郡神田村荻原松浦氏宅

松浦伊一氏、百出冬子其他熱心な求道者の涙と吐息とによつて生れた講演會。ささやかであるとも血がにじむである。猫、大草、和木方面からの參詣で座談もはづむ時には小高い丘の白いそばの花の影で、草の上にゴザを敷いて更くる夜を忘れて語つた。この草深い田舍にも救はれた悦びを抱いて勞働しつつ念佛してゐる若いあなた達があると思ふ時、やつぱり大地は温い。

十七日に主管は神田村の學校に處女會に講演。十二時過の自動車で河内から本部へ。河内では懐しい中務さんが待つてゐて下さつた。

廿三日晩より山縣郡八幡村樽床後藤氏宅

廿六日日中まで

廿三日朝一番の自動車で三段峡へ、車が一切ないので二里程徒歩とう〳〵松原の河野先生の宅まで行くと日が暮れる。主管は馬に乘る。洋服を着てワラジをはいた面白い姿。七八年ぶりにワラジをはいてうれしかつた。

河野先生はわざ〳〵私と歩いて下さる。一里も歩いた頃足が赤くなつて痛む頃に、丁度後藤吾妻氏の心づくしで馬で迎へに來てゐて下さつたので、私もそれから乘馬と洒落た。生れて初めての馬乘り、洋服姿でワラジをはいて昔の士が使つたらしい馬具をつけて、二人の法將軍は樽床へと急ぐ姿？　皆樣に見せたかつた。

それは素的でした。海拔三千尺もある中國山脈の頂上の高原を夜霧は靜に降りて道ばたの小草のさゆらぎにも神の聲の聞ける樣な夜、淡い月光をあびながら八ッの蹄の音高く、月の宮居にでも入る氣がする。

會場では今遲しとまつてゐて下さる同胞に獅々吼。始めから終りまで同じ樣な參詣で熱心であることに驚いた。ここは天下の絶景三段峡の上流で、石州境だけあつて原始時代を忍ぶものが多いい。今回は三段峡に安置する大佛樣のおびもとけの講演で、二丈餘りもある木佛尊像の

み前にひれ伏して幾度か久遠の彌陀を想つた。この大きな福德圓滿な尊像のみ前に座して合掌すれば、自ら心和む感がある。後藤さんと河野先生と主管と私と四人で三段峽の北端の絶景を見に行つたのが廿五日朝、實に聞きしに勝る絶勝である。默つてこの絶勝に立てば幽遠な神話を聞くの感がある。そして誰でもこの仙境には醉はされて我を忘れることだろう。

玉と散り雪とくだくるシブキの岩かげに無言に咲く眞白き無名草。濁亂の世に念佛に生きる貴ふとき日影者にも似て涙ぐまし。

山は數千年を語る大木に暗く、平原は高山植物に珍らしく、白粉花とやらで、紫色の花に霞む。高原一帶唯花野原。

二つの今蓮生坊が馬上ゆるやかに懷しい村人に帽子を打ふりながらサヨナラをしたのは廿六日の午後、素朴なる村人よ健在であれ。

廿六日晩より
廿九日晩まで同郡戸河内村松原奈良津氏宅

無言で只信念をもつて活動して居られる河野藤九郎校長及び奥樣の何邊かの吐息で開かれた講演會。樽床からも五六人參つたりして盛大。ここもやつぱり三分の二は幽靈の村で運動が容易でない。河野校長の奥樣のお骨折と親切つたらとても……

こう書きながら思ふ。今でも涙ぐまづには居られない坊ちやまを亡くせられてから以來先生も奥樣も熱心な寂しい求道家である。

近所へ行けばどこ迄も來て求めてゐられる。この近邊は河野先生等の信念で動いてゐる。

廿九日の朝覺えのある人が來ると思へば、加計の水谷から平田屋さん達が三人で來る。

加計からここ迄六里餘りもある。乘物一つ乘らずに六里の道を……

思ふと私は泣けて〳〵仕方がなかつた。珠數をかけて拜みたい樣な氣がして、醒めよ〳〵と云ひながら眠つてゐる私に大きい說法をしてくれた。この間も大朝まで七里歩いて行つて然も泊らずに歸ると云ふ求道ぶりには一寸驚かされる。今回はたくさんの青年處女の方にめざめて頂いてうれしかつた。

私は一足先へ出て戸河内の本郷へ自動車で。

廿九日晩より
十月二日晩まで戸河内村支部發會式

たつた一回の講演で八十名ばかりの團員を得て今回は

支部の發會式。丸山倉人氏は寢食を忘れて努力して下さつた。會場は本郷青年會館。

四五日前から栗が落ち始めたので、畫は栗に拾はれる人が多いので集りが少く、夜は會場へ一杯、一日正午十二時發會式執行。

靜な〳〵君が代の國歌に始まつて

勅語奉讀——支部長丸山倉人氏
開會の詞　支部長
合掌宣言　紫線
主管告示
來賓祝詞
答詞
團歌（第一團歌）
閉會の詞

岸本登記所々長、西田小學校長、醫師森先生を始め團員等七十餘名、發會式として未曾有の寂しいものであつたがシツクリとして、主管の告示にも來賓の祝詞にも別して信念ある森先生の嘆異鈔拜讀に、慈悲の涙にむすばれてのシメヤカな團歌にも何故か故知らぬ涙がこみあげて泣かされた。靜な式だけれど其底に力がある。

光明團は若き者が多い。それだけ打てばボーンと打返す勢がある。

若いか故に延びる希望にもゆる學をふるわせて歌ふ。我等の團歌がどこ迄響く……か、見て居れ！と言つてやりたい樣な氣がする。

皆樣ありがとう。私達は默つて合掌しながら求道しませう。私達が不束な爲に誤解のあることも存じてゐます折入つて話さなければならぬことも持つてゐます。何事もよつく分つてゐます。たゞ安心して求道して下さい。私達は決して見る目と聞く耳を持たない人達の言葉で動く血はもつてはなりません。

長くなりました。今度お合ひした時にゆづつてペンを置きます。

支部長、幹事、其他の報告は時を見て發表します。

私は一日の午後本部へ例會に、本部の佐々木吉藤氏等と夜外傳道をして例會の講演にうつる。座敷がせまい程のお集り。大盛會。

三日の晩は主管がおかへり。私は福山へ。

ほめられてうれしくもなしそしられて
悲しくもなし我はわれなり

新入園者芳名

廣島縣

山縣郡　三戸サカエ　安本政市　上田マサノ　井上清志　齊藤一男　土田みや子　淺枝さとよ　森本清市　小田あさよ　守下おとき　新田千里　栗栖政人　山根作一　佐藤彌兵衛　佐々木如風　滋野きくみ、田形春夫　上川順三　田淵しずよ　村竹しず　山根なつよ　齊藤こずゑ　藤田つな　柳川かなめ　新田末三　岡本高夫　西田みつえ　新田早人　山門助市　岸本みさを　西本きくよ　道菅はなよ　菅みね　川本しげ　丸山きくよ　丸山おくよ　森本きさよ　新田貞子　島川敏子　新田みきよ　新田かつ子　稲垣秋子　齊藤こずゑ　平田小波　伊藤綾子　長尾潔　瀬川秀貴　瀬川義吉　川本一郎　田淵寅一　三浦小八　谷口近一　松榮元一　栗栖庄作　西田工　栗栖悠　栗栖六一　栗栖貞一　藤原豊美　本家辰一　中野繁一　津田甚吾　深見靖夫　道菅玉美　岡本清人　庄野憲吾　住田達雄　住田テル　富岡八重子　富岡ミスイ　當岡ヤヨキ　沖段チエミ　丸山花子　吉野久行

高田郡　岡山美惠　米澤輝子　中村八郎　南波勇　竹内さくの　小林谷人　中土俊作　宮本米市　向井市子　水戸節二　河野　阿堅謙三　佐々木つるゑ　西山義一　吉見村夫　川重秀雄　佐々木勲一　世羅かつ子　市塲正夫　隅原卓治　谷川ますみ　佐々木治郎一　隅原増吉　佐々木依子　行政宮子　大田芳子　吉見次六　惠京ふじ子　玉村一二　玉井作次　國元健哲　國川雅池本順一　宗利俊造　宗利哲次郎　重廣要　高塚文雄宗田健一　宗田春人　上田利一　三木昇一　新道良人井上多々造　宮崎コハル　竹内精市　行村一松　黒川泳市　宮吉彌八　甲元司六　藤川義照　岡村綾子　入迫等　井上橋平　倉田鐵之助　兼本範六　信永賢市平尾孫平　田淵カズヱ　新出久惠子　景田クヱ　平岡完太郎　秋田晃夫　谷岡俊夫　大丸なつみ　大丸あきの　吉見賛六　榎德次　長谷川軍一　大畑コイト　西岡勇　川角一男　隅原庄一　佐々木次六　久保彌六吉野守人　重光彌四郎　中塚ハツミ　藤井カズヱ　賀張勝一　福丸よしゑ　池本藤三九　國山實雄　米田一一　新藤軍次　國安たま　廣升花子　栗原和市　小川スナ　沖田トナ　小林靜子　小川ハツミ　國司ミツヱ吉見悟　中村義治　二村ツマ　山中チクミ　富本利市前川カヤノ　松井末松　西井善一　向井甚太郎　辰川

橋本ウメ　水田シゲ子　大塚アサヱ　井口キミヱ　佐々木繁樹　新出智惠子　平原福二郎　平原敏一　石田増二　三上與四郎　小川源十郎　村川琢磨　米下悟谷川壽一　平木輔三　増田源一　小島勝二　谷川覺藏丸山智一　近永勝二　神田京一　向井龜太郎　村崎チヱミ　兒玉一彦　北川イトヨ

安佐郡　宮川九市　佐々木定夫　細田はるよ　沖野勲丸本順吉　寅川仁一郎　山本きみ子　上端奠夫　森脇佐久　末田惣市　松浦勘五郎

佐伯郡　山田和三男　和田玉二郎　中原ヒサ子　白井龍一　角田與一　加藤健一　西川綱一　大方三郎　宮戸田信吉　角田清太郎　森本作市　今中文作　青木須人　迫勝吉　下本復市　青野カメ子　中川竹子　村本謹一　村本キヨル　小林チセ　河添フタヨ　古田キクノ　近川マキ　石川庄之助　三浦武一　沖野靜太　大石要之助　山崎島太　岡田助太　清原トキ　藤浪ユリ子　五味謹四郎　久保嘉一　植村定　村田勝

世羅郡　遠藤芳夫　仲間順一　松浦伊一　西繁一　百出夏子　池本實　森浦正一　田才繁　折口よし子　石田作一　賀茂郡　益川以德　大村福子　藤井忠　富田巳之吉谷岡オギ　宮田キヌヨ　加仁谷卓一　益清スヱノ　山下君子　小田はつよ　平田あやめ　中垣内おさの　香川久代　森高富香美　上垣内義登　高岡あや子　五藤モトム　森田庄一　高廣積　藤原花子

沼隈郡　松岡定　野田タツ子

廣島市　波多野勇　西本サダ子　山本サトノ　田中シズカ　逸本ミツヨ　岸本さよ子　沼崎先生

豊田郡　中務春枝　大石先生　中川靜子　三谷哲二植村サダ子　梶田捨二　松本嘉市　金近正　上田悟樋口リウ　石立幸一　木村伊太郎　村上佐一　山口正友　中井長市　金近增次　松岡寅松　住田先生　森浦政市　森田武作

安芸郡　友伊一衛　細田ムツ　河野先生

御調郡　平田ゆきの　福島義夫　花本清市　久保俊二新谷新太郎　瀬戸憲一　渡邊ミチ子　小松茂

呉　市　上馬塲貞夫　出村善成　佐藤正實

福山市　栗原ちか　小林なつ子　池田元三郎　門田トク　河村キミ子　平井セキ子　造賀千枝子

東京市　島貫芳野　山崎睦子　羽村免代　青木眞子

藤井ウメヨ
山形縣　米澤屋支店
山口縣　谷清子　福宮正雄　西村匡介　角本嘉市
朝鮮　杉山貞
熊本縣　後藤確
大阪市　宮本勝美
大分縣　吉村みつ
下關市　松永平藏
神戸市　中西利三郎
岩手縣　松浦靜子
福岡縣　重松豊治
鹿兒島縣　四之サチ　松浦忠義　田代萩枝　中村悅子
栃木縣　安養寺
對島　俵ユキ子
姫路市　川野シズヲ
岡山市　連池堯民　吉中佳長夫
島根縣　竹田竹一郎

團員紹介者芳名

今田　龜吉氏	一〇	丸山　賢藏氏	二
森　醫　院	六	谷川　賢藏氏	一七
臺　一乘氏	八	吉中　卓二氏	四
戸田　次夫氏	二	吉田　吉郎氏	二
岡田　圓吉氏	一	丸山　藏人氏	五〇
井上　清志氏	一	中土　俊作氏	四
上端　廣務氏	七	下田　利一氏	一
龜谷　宇一氏	一	佐々木紫風氏	一
櫻井伊長次氏	一	吉藤　真一氏	二
竹内　俊夫氏	一	伊藤　忠二氏	一
中村　松男氏	二	西原　勝美氏	一
河野藤九郎氏	一	中井とめ子様	六
伊藤たまき様	二	濱田　政子様	六
安達　鶴枝様	一	野田　靜子様	三
永野きくゐ様	一	中務みつよ様	三
正木ます子様	一	宮下くさゐ様	二
久賀谷君代様	二	家弓さみゐ様	一
臺　みつよ様	一	樋山　リウ様	一
梶濱セツヨ様	一	小川　スナ様	一〇

聖光

毎月一日發行

光明の姉妹雜誌です。信仰のことは書きませぬ。生活を向上徹底さす最良の友たらんことを期してゐます。皆様から大變な感謝を受けてゐます。智識階級及青年男女は、是非御讀み下さい。

當分聖光の定價を、一ヶ年壹圓とします。必ず前金で申込み下さい。

十人以上御紹介下さいましたお方には、一ヶ年無代で差上げます。

誌代前納

一事が萬事です。半年も一年も前金切れのまゝでゐる人が十人中五人あります。

机の上を見ただけで其人の一生がわかる。修養は小さいことからです。

前金切れの知らせがあつた時、すぐ振替で半年以上を御出し下さい。

大正十五年十月十日印刷
大正十五年十月十五日發行

本誌定價
一冊　金拾錢
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵稅共）

編輯兼發行人　花岡靜人
廣島市鐵砲町四十八番地
印刷人　石佛二郎
印刷所　石佛印刷所
廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本眞宗　光明團本部
振替貯金口座ヲ關貳參〇八番